

## 殺生譚の変貌（三）

### ——中世説話から近世説話へ

（この論考は専修国文第八一号に掲載したものの続稿である）

石 黒 吉次郎

#### 七

前節では『沙石集』の系譜を目指した近世説話集の殺生譚を扱ったが、近世ではむしろ『古今著聞集』の名を意識した書の方が目につくところである。次にこれらの中から、殺生譚及び殺生意識の変化を探ってみよう。

まず仮名草子に『古今犬著聞集』全十二巻がある。序文には、

……

我にも一ツの癖あり、昔は若かりし時より、人と語ることに、なにはにつけて、耳の底に残る程の、よしなしごとを、反故のうちに、筆の海浅き心に、伊奈佐細江の、みをつくし、記しと、め置侍し、……せめて、片時も、かく命なからへしを、更の事にして、腰をか、め目をかすめ、そゝろに清書に至りぬ。

さ、のは猿の、知恵はともなくて、むしほの老さらはいし身の、なすわさなれハ、犬著聞集と名付侍る物ならし

天和四年甲子歳孟春

とある。天和四年は一六八四年である。人間の世間話を好む性癖は、説話文学が発生する大きな原動力であった。編者は世の噂話から儒教や仏教の説くところに適うものに注目していったのであろう。書名は仮名草子にふさわしく「犬」を冠して、『古今著聞集』の継承を意識している。ただし王朝文化を百科辞書風に編纂した『著聞集』とは対照的に、京や地方の奇談を説経風に雑纂的に叙述しており、『犬著聞集』にふさわしい内容となっている。各地の奇談が人から人へ伝わり、諸国を駆け巡る現象は、近世に於いてますます顕著になったであろう。

この中から動物の殺生に関する記事を拾うと、巻一・殺生して報事（九話）に、寛文七年（一六六七）越前国の高畠甚五左衛門という者が楊子を用いるうち、これが喉に入り、死去してしまった。これは彼が常に釣を好み、多くの魚の喉に針を刺したためであるところである。殺生による不幸型で、この殺生譚タイプ二は中国の仏教説話によく見られ、日本の近世でも見かけることの多い話型である。殺生譚としては単純な構造を持つもので、構想しやすかったのである。人間の異常な死去は、様々な憶測を呼んだ。この高畠氏の珍しい死も殺生による因果応報とされたのである。事故の起った年月を記しており、これがリアルな印象を与えている。一方では同巻・狸、妖る事（十七話）では、下総国松法寺において、古狸が人々をたぶらかしたので、これを打ち殺したとあり、『宇治拾遺物語』巻八・狢師仏を射事に見る如く、仏法に仇をなす動物は容赦なく排除された。同巻・助鼠、得金事（二十一話）は、寛文六年の話として、江戸の香具屋九良左衛門の家では鼠が暴れたため、これを外落しで捕らえた。家来が不便に思っ助けたところ、夢に鼠が現われ、金壱分を与えた。これ以後この家では鼠を殺さなくなったというもので、これも近世に多い動物報恩譚である。そして同巻・犬を殺して報事（二十三話）、同・蛇を殺報事（二十四話）も、殺生による不幸型である。同巻・柳津虚空蔵、崇有事（二十七話）は、出羽国会津（会津は岩代国にある）の柳津円蔵寺の池は殺生禁断

の所であつた。ところが蒲生下野守は、この池の魚が多すぎて見苦しいと、多くの魚を殺した。するとその日から大地震が起り、十四日間余震が続いた。下野守の家も途絶えたというもので、これも殺生による不幸型であるが、話のスケールが大きくて興味深い。同巻・鴈風呂の事（三十一話）は、雁が渡る時にくわえた木を集め、風呂を焚くのに用いるという津軽地方の習慣を記したもので、これは人に殺された雁を供養するものという。放生会の延長にあるような動物供養譚である。同巻・餌指、発心之事（三十五話）は、本田中務家中の餌指<sup>えさし</sup>が鳥を殺してきた報いで子供達を失ったこと等により、出家したというもので、殺生譚タイプの一に属する。殺生が子に報いるのは、この頃にも多く見られる型であつた。

巻二・奥州磐手明神事（二話）は、南部藩の岩手の温泉地は、殺生禁断の所であつたが、守護の信濃守が鳥獸を調理したため霖雨暇なかつた。明神が白蛇となつて現われるなどの奇瑞が起つたため、守は社殿を造営したというもので、巻一・柳津虚空、崇有事と類似する話である。能には「鵜飼」や「阿漕」に殺生禁断を無視してリンチに遭つて殺される話があるが、これは地方の権力者が殺生禁断を破り、そのためにその地方が災厄に見舞われるというもので、新しい型の話である。『古今著聞集』巻六には、筆筆吹きの遠理が、阿波守となつた父とともに下向した。当国で早魃となつたため、遠理は神社に詣でて奉幣、筆筆を吹いたところ、たちまちに降雨があつたとあり（『教訓抄』巻七では阿波守為理のこととする）、国の長たる守の行為は、国中に影響をもたらすという発想が伝統的であつた。『犬著聞集』のこれらの話は『著聞集』の話の方向とは逆になっているが、このタイプは近世の特徴であろう。この時期各地の寺社で殺生禁断が行われていたことが知られる。同巻・鳥を殺し報事（二話）は、江戸の虎屋甚右衛門が鳥を取っていたため、病氣となつて死んだというものである。同巻・人を殺、頭事（十二話）は、名古屋で絹売りが殺され、証拠が残されていたために犯人が捕えられたというもので、その露見の仕方に著者の関心はあり、より知的

な関心から記しており、因果応報的な宗教的な見解はむしろ薄い。動物に対する殺生には仏教的な罪悪感がつきまとうのであるが、逆に人間に対する殺生は、むしろ原因や事情を明らかにする観点から、あるいは法的な立場から叙述されることもある。こうした傾向に伴って、『犬著聞集』では諸国の敵討ちの話も多い。敵討ちは人に対する殺生の法的な解決の一つであった。動物は神聖な存在でありながら、人間に較べて弱者でもあり、不殺生戒による保護が必要でもあった。同巻・狸切、恥辱かく事（十九話）は、寛文十年（一六七〇）江戸の浪人が狸を切り殺し、仕留めたことを人々に自慢したために、大騒ぎになったというもので、浪人の軽率さを責めている。人をたぶらかすとされた狸の成敗は、古来罪惡視されなかった傾向がある。

巻三・助蛇有徳事（十五話）は、上杉家の家臣野田彦兵衛の先祖は白蛇を助け、そのお礼に蛇から一門が繁栄する一子相伝の呪文を授けられたという動物報恩譚である。蛇神と人間の婚姻による始祖の誕生という三輪山型の説話は古来有名であるが、これはその変型といえる話であろう。同巻・放生川の魚盗人寶拳附公事扱（二十六話）は、八幡の放生川は殺生禁断の所であったが、淀の者がしばしば密漁をした。社人は古例に任せ、寶拳に処した。これが江戸で問題となり、社人の追放案が出た。しかし寺社奉行板倉石見守は、殺生禁断の政道を固持するため、五十日の閉門案を出したというもので、ここでは石清水八幡宮で、殺生禁断を犯したものは私刑に処せられていたことや、幕府においても往古の朝廷のように、殺生禁断政策を重んじていたことがうかがわれる。同巻・常に殺生して、子に報し事（三十四話）では、丹後国宮津の犬打ちの久六は、我が娘を犬と誤って打ち殺してしまったというもので、殺生が子に報いるタイプの話である。

巻四・殺生により、我子に報事（十七話）は、寛文十二年伊勢国である男が狐を殺したところ、妻が奇怪な娘を産んだこと、尾張国の女が雁の羽をむしって肩骨だけにしたところ、肩骨はありながら、手のない子を産んだことを記

す。

卷六・大蛇を殺、崇にあふ事(七話)は、伊予国の庄屋が大蛇を殺して捨てたところ、家門が絶えたというものである。寛永十五年(一六三八)のこととする。動物への殺生が子に報いるのみならず、一門滅亡という深刻な事態を招いた話で、この大蛇の存在が重要であったことが知られる。同卷・人殺報有事(三十二話)は、延宝七年(一六七九)相模国の大工が手のつけられない甥を搦めて海に沈めた。翌年その妻が出産したが、小角が生えるなど異常な有様で、顔は甥に似ていたので、その子も押し殺してしまったというものである。これは伝統的な動物の殺生譚が人間の場合に置き換えられたもので、その結果は動物の場合と同様であった。水底に沈めたというのは、伝統的な私刑の法に通じるものである。同卷・非分にて家来殺報事(三十八話)は、伊勢国の宝珠院はさして罪のない家来を成敗した。このため家来の母は飼ひ猫に復讐を頼んでその首を刎ねた。その後代々宝珠院は猫の鳴き声の真似をして死んだという。これは近世らしい凝った説話となっている。動物報恩譚の一種であり、また復讐譚の一種でもある。

卷七・家人を殺、我子に報事(十二話)は、掃部という武家は、毎年のように家来を手討ちにしていたが、その二人の子息は乱心し、正氣に戻っては身の上を嘆いていたというものである。これも卷六・三十二話と同様に、殺人の罪が子に報いるという近世的なテーマとなっている。同卷・狐、取りたる鷺を返す事(十九話)は、竹越山城守の家で飼っていた鷺が狐に盗まれた。狐の穴に向かい、狐狩をもつて脅すと、狐がこれを返したというもので、これは動物と人間の交流譚とすることにする。この種の交流譚も先の『三国伝記』の天竺の例に見るように、伝統的なものがあった。同卷・馬の死霊、人に付事(二十二話)は、松平阿波守の屋敷で、馬が責められて死んだ後、馬屋の者が狂乱して死んだというもので、動物の殺生による不幸のほかに、動物の人間に対する復讐譚という意味も感じられる。同卷・臨終に猫来る事(三十四話)は、寛文七年江戸の町家で、老齢の下女が重病となった。いずくともなく猫が現

われ、人々が追ひ払っても去らなかつた。そして下女の死とともに姿を消したというもので、これは猫が自分を虐待したことへ報復した感もあるが、「定て畜生道ハ、まぬかれかたからん、と、返く哀に侍る」と評語を加えているのを見ると、この猫は下女を畜生道に導く役目を負っていたようである。

巻八・法恩寺江鯉を送る事（一話）は、下総国下曾根村の天神社辺の池に大蛇が住み、人を取ったので、法恩寺の住侶がこれに念仏を勧めて鎮めた。天神の告げにより、以後法恩寺は正月元旦に鯉二匹が届けられ、仏前に供えられることになったという。池の大蛇が人に害をなすという地方伝承は、能の番外曲「生贄」等にうかがわれるが、この曲では駿河国のこととする。ことにこの話型に関連するのは御伽草子の「さよひめ」で、奥州に売られていったさよ姫は、そこで大蛇の生贄とされる。しかるに父の形見の法華経により、大蛇を成仏させるといふプロットに似ている。<sup>(29)</sup> また鯉を仏前に供することは仏意神慮にかなうのだという考えは、先述のように『沙石集』などに見える、神々が魚類の往生を守るといふ思想の近世的な変型といつてよいであろう。殺生譚タイプとしては八に入れてよい。同巻・狐、恩を知る事（十話）は、江戸の河野権右衛門の屋敷で狐をかわいがり、その恩を感じた狐が権右衛門を鉄砲頭にしたというもので、動物の報恩譚である。同巻・古猫妖事（十七話）では、奥平刑部左衛門は狐を射殺し、そのために気の病となっていた。夜になって大きな古猫を見かけ、これを仕留めた。それより快気したが、これは狐と猫とは親しい関係にあり、猫が狐のために敵をとっていたためであるとする。これは殺生による不幸という仏教的な説話よりは、霊なる動物の祟り譚で、しかも人間はそれを祓うことができた例である。同巻・牛、人に報事（二十一話）は、江戸の扇屋は細工が上手で、牛の子に虎の皮を縫い合わせては芝居に出し、金銭を得ていたが、病氣となり牛の鳴きまねをして死去したというもので、殺生による不幸型である。動物を虐待すると自分も畜生道に堕ち、その動物となってしまうという教訓が背景にあるのであろう。動物の復讐譚に近いものでもある。

卷九・狐に妙有事（十一話）は、渡辺玄古の弟子に狐が憑いたが、夢に現われた狐は、自分が源五良といい、三千歳を経た者で、神道儒道を学んだが、仏性を得ることはかなわないと語るもので、この話は「猫のさうし」など御伽草子の異類物の一種の構想にも似ていて興味深い。近世初期にはこうした話のタイプが好まれたのであろう。同巻・猿、己か子の敵を取事（二十三話）は、富士根方村で、猿が鷲に子をとられ、復讐に百姓の子を木の上に連れて行き、鷲が子を狙うと、大枝をたわめてこれを打ち殺したというものである。動物同士の恩讐を取り上げており、これは先の巻八・十七話の狐と猫の話にも通じる。同巻・井深九郎兵衛、大蛇切事（二十六話）は、信濃国高遠のこととして、鷹匠頭の井深九郎兵衛が大蛇を退治したが、洪水が起こり、自身もわずらったというもので、殺生による不幸型であるが、この大蛇は土地の神のような存在で、そのために深刻な災厄が起こったらしく、したがって殺生禁断を犯した話にも属する。ただし、放生と関わるものではない。殺生禁断を侵すと、大雨や洪水に見舞われるという考えは共通して見られる。卷十・霧山大蛇の事には、出羽国の霧山は、大蛇がこれを巻いて守護していたとあり、卷十一・戸和田池大蛇の事にも、陸奥国奥瀬郡の池に大蛇が住み、人々が願をかけて刀、脇指等を投げ入れると、願成就の場合はこれらが沈み、願がかなわないとこれらが飛び返ったという話が見えて、各地にその地を支配する神として大蛇の霊験が語られていたことが知られる。同巻・猿を殺、発心する事（二十七話）は、信濃国伊那郡の話として、獵人が大猿を仕留め、家に持ち帰ると、夜中小猿達がやって来て、親猿の鉄砲傷を手当てしているのを見て、念仏者となって諸国を行脚したというもので、殺生による出家譚は古代以来の話型であるが、動物の親子の恩愛を見て出家したという点が後代らしい形である。同巻・悪霊、人を殺事（三十話）は、大坂の話で、ある家の下女が古井戸へ落とされて殺され、その恨みでその家の子を殺したというものである。さらに同巻・三八、人を殺し、懺悔の事（三十一話）は、常陸国の話で、名主三八は昔強盗殺人を重ねていたが、その報いで子供達は盲目など障害を持つ者

が多かったという。殺人の罪によって子に報復されるというのは、近世には好まれた話のようである。靈魂による復讐譚が中国からの影響もあつて流行し始めたのであろう。

卷十一・猫、奉公人の女に妖事（二十話）では、ある旗本が息女の後見に才芸・美貌に恵まれた女を雇い入れたが、その怪しさに切ってみると、古猫であつたというもので、御伽草子「玉藻の前」を思わせる話で、リアル感があり、ストーリーの面白さがある。旗本の家で、奉公人をめぐる何か奇怪な事件があつたのであろう。同巻・蛇、人の恩を知ル事（二十七話）は、和泉国榎の尾山近くの僧が蛇を飼っていたが、大きくなったため、これを池に放し、ここの主になれとした。その後ある里人が水浴びをして蛇に殺されたため、成敗されることとなった。例の僧が池に向かい、大蛇を恨んだところ、大蛇は岩に頭を打ち付けて死んだというものである。本書においては各地の主的な大蛇の話は比較的多い。この時期の人々には関心のあつた話題であつたらしい。動物の報恩譚に入れて置くことにする。

卷十二・幽霊成仏の事（一話）は下総国岡田郡羽生村の与右衛門が醜い妻のかさねを殺した報いで、その後妻達も次々に死去したという話で、元禄三年（一六九〇）刊の仮名草子『死霊解脱物語聞書』で有名で、『新著聞集』第三にも見え、浄瑠璃・歌舞伎では累物の系譜ができるまでになった。かさねの死霊は夫の妻達のほか、その子孫にまで及ぶという稀に見る手強いものとなったのである。殺生における因果応報譚の極めて近世的な形で、スケールが大きい。なお与右衛門は出家することになる。これに続く臨終正念之事（二話）、子共浮ぶ事（三話）はかさね等成仏の後日談であるから、編者がいかにこの話に関心を抱いていたかがわかる。編者の掠梨一雪も、あるいは念仏の徒であつたかも知れない。同巻・菊女、小畑孫市家を亡事（十三話）は、小畑家の召使菊が誤って飯椀に針を落としていたため、古井戸へ落とされて殺され、これを恨んだその母も井戸へ落とされた。その後二人は悪霊となって主人夫婦



を始め、縁者の人々を殺して一家を亡ぼしたというもので、仏教的な因果応報譚というよりも怪談的な趣が強い。同巻・戸川肥後守事（十四話）も同様で、戸川家で娘の乳母と料理人が密通したため、成敗されてしまった。その夜より幽霊が出、主人の娘を取り殺したという。これも後の小説や演劇の種にふさわしい怪談となっている。同巻・化物打留る事（十六話）は、里見大膳が屋敷をたまわることとなり、化け物屋敷と称せられる所を手に入れた。移涉した日から化け物が現われたのでこれを切ったところ、古狸であった。この狸は山伏に姿を変え、「我ハ此屋敷の主也」と名のつていたので、必ずしも狸に非があるわけではない。動物と人間との住処争いで、今日的な問題でもある。ここでは当然動物による怪異譚として取り扱われている。テーマとしては、一応人をたぶらかす動物を成敗する話に入れて置く。

以上、『古今犬著聞集』における動物の殺生等に関する話の型をまとめると、次のようになる。なお、\*印は人間を対象とした殺生の話である。

殺生を機縁とする出家譚：巻一・三十五話、巻九・二十七話、\*巻十二・一話

殺生による不幸型：巻一・九話、同・二十三話、同・二十四話、同・二十七話、巻二・一話、同・二話、\*同・

十二話、巻三・三十四話、巻四・十七話、巻六・七話、\*同・三十二話、\*同・三十八話、\*巻七・十二

話、同・二十二話、巻八・二十一話、巻九・二十六話、\*同・三十話、\*同・三十一話、\*巻十二・一話、

\*同・十三話、\*巻同・十四話

殺生禁断を犯す：巻一・二十七話、巻二・一話、巻九・二十六話

子に報う：巻三・三十四話、巻四・十七話、巻六・七話、\*同・三十二話、\*巻七・十二話、\*巻九・三十

話、\*同・三十一話、\*巻十二・一話、\*同・十四話

人をたぶらかす動物を成敗する…卷一・十七話、卷二・十九話、卷十一・二十話、卷十二・十六話

動物報恩譚…卷一・二十一話、卷三・十五話、卷六・三十八話、卷八・十話、卷十一・二十七話

動物供養譚…卷一・三十一話、

殺生禁断の固持…卷三・二十六話

動物と人間の交流譚…卷七・十九話、卷九・十一話

動物の人間に対する復讐…卷七・二十二話、同・三十四話、卷八・二十一話

殺生を特別に許容する…卷八・一話

動物の崇り…卷八・十七話、卷九・十一話

動物同士の恩讐…卷九・二十三話

これに拠ると生き物を殺したために不幸に陥るといふ話が多く、殺生による墮地獄は見えない。殺生の罪は現世において報われるもので、それは子に及ぶことが多い。殺生譚はこうしてある意味で従来に較べて単純化する。仏教的な来世観はここでは影を潜めているのである。さらには人に対する殺生譚も多く、これは『犬著聞集』では敵討ちのテーマに発展することもあるが、妻や召使など社会的に弱い立場の者を殺害した場合は、かえって深刻な結果を招くことになる。卷十二・十四話の小畑孫市家のように、悪霊によって一門根絶やしにされる場合もある。ここには古代的な手強い怨霊の復活さえ感じられる。しかもこの種の話は、仏教の不殺生戒を説くというよりも、近世らしい怪談への興味を感じさせるものである。

## 八

次に『新著聞集』十八巻は紀州藩士であった神谷襄勇軒（通称善右衛門）の著で、藩主徳川宗将の命を受けて編纂したものであった。『古今著聞集』等の中世説話集の伝統を引きながら、諸国の奇談を数多く集めているところに特色がある。ただし本書は宝永元年（一七〇四）の一雪の序文を持つ『続著聞集』を編集し直し、寛延二年（一七四九）に出版したもので、東京大学総合図書館の南葵文庫には、その『続著聞集』の写本が蔵せられている。<sup>(9)</sup> 紀州徳川藩では、たとえば二代藩主光貞が、民治教諭を行なったり、孝子を賞したりしていた。<sup>(1)</sup> そうした民衆教育の伝統が紀州藩に続き、その一環として本書の編纂がなされたのであろう。

このうち第二慈愛篇に動物に関する説話がある。鶏雄を煮るをなげく（一話）は、越前国福井の話として、飼っていた雄の鶏を殺して調理したところ、雌が雄を慕って鳴いたため、人々は恐れて雄の肉を喰わなかったというものである。鳥の番の愛情譚は、中世に流布した阿曾沼説話の系統を受けるものであるが、『新著聞集』の話には、伝統的な思考のほかに、実際の動物観察もあって、より自然に近い形になっている。この篇を「慈愛篇」と称しているのは、本書が仏教のほか儒教的な思想を背景としているためである。すなわちこの書は、第一忠孝篇・第二慈愛篇・第三酬恩篇・第四酬仇篇・第五崇行篇・第六勝蹟篇・第七勇烈篇・第八佞奸篇等々と篇名が続いている。次の、母燕雛を愛して雄を追ふ（二話）は大坂道頓堀の話で、母子のみとなった燕の巢に別の雄が来たが、この雄が雛を殺すので、母燕がこれを追うようになったというものである。これにも当時の人々の燕に対する行き届いた観察が感じられる。末尾には「貞享三年の事なり」とあり、実話であることが強調されている。次の、母猿子をうしなふて水に没す（三話）は信濃国下伊那郡殿島の話として、百姓に飼われていた猿の母子がいたが、子猿が誤って死んだのを見て、母猿がその子を抱きながら入水したというものである。これらは人間の動物殺生とその罪の報いの話ではないが、近

世の人々の鳥獸に対する精神生活の一端がうかがわれる。これらには虚構もあるであろうが、必ずしも宗教とは関わらない、古来の日本人の動物に対するやさしいまなざしがあるとも言えるであろう。こうした点が本書における動物観の特徴でもある。猿子親を療して人心を感発す（六話）は信濃の下伊那郡入野谷村の話で、獺に出た者が大猿を仕留め、家に置いたところ、小猿達が親を介抱するのを見て、翌日出家し諸国行脚に出たというものである。これは先の『古今犬著聞集』の巻九・二十七話と同様である。以上の動物の夫婦・親子間の慈愛譚は、人間間の慈愛譚に交えて記されているもので、『新著聞集』においては、動物の世界と人間世界は相近いものとして意識される傾向が強い。

第三酬恩篇はテーマの上で第二慈愛篇に接ぐものである。動物報恩譚を五種集めている。犬嶮難を救ふ（一話）は駿府の酒井家で、飼い犬が谷に落ちた小坊主を助けた話で、寛文三年（一六六三）のこととする。蛇密符を伝ふ（二話）は、上杉家の家臣静田彦兵衛の先祖がある日白蛇を助け、一子相伝の呪文を授けられたというものである。この話も『犬著聞集』巻三にあるが（十五話）、これでは野田彦兵衛の先祖のこととなっている。活鼠金を奉ず（三話）は『犬著聞集』巻一・二十一話と同類である。猫舌を噉斃す（四話）は、飼い猫が主人の死とともに、自らも命を絶ったというもので、これも一種の動物報恩譚であろう。鶏をいかして賞にあふ（五話）は、動物の命を助けたために好運を得るという話である。近世においては放生のほか、動物の殺生をその報恩譚によって阻止するという考えがより強くなったのであろう。この篇では人間と動物の交流が一層密に語られている。『犬著聞集』の動物譚は、人間の話に交って記されるのであるが、『新著聞集』では第三編のようにまとまって収録される傾向があり、編者の動物に対する関心はより高いともいえるであろう。またこの書はテーマ毎に編が構成されており、より『古今著聞集』の構成を意識したものとなっていることも注目される。

第四報仇篇では、猿恨性をなす(一話)は京都の北山大原野で櫛笥殿が鉄砲で大猿を打ったが、これがもとで病死したというものである。従来の説話集では、殺生の罪により自然と不幸になる人間の話を記すのであるが、本話は猿が悪霊となって、積極的に人間に報復しており、これは弱者の立場にある人間が殺された後に復讐する様と同じである。ここにも人間と動物の関係は、より近いものとして考えられていることを見ることが出来る。殺害の僧子となつて家をほろぼす(二話)は、江戸の武家が若年に僧を殺して金子を奪つたため、その家が滅んでしまう話で、殺生による御家断絶は『犬著聞集』にも見え、近世奇談のテーマの一つでもあったが、これは僧を殺害するという大罪を犯したためでもある。怨念忽ち巫女に附て敵を害す(三話)も、江戸において武家が家来を非道に殺したところ、靈魂が巫女に取りついて主人を殺したというものである。驗士を殺して後刑戮せらる(四話)は、京で山伏を殺した宿の主人が、これを目撃した自分の娘をも殺し、最期には磔にされたというもので、悪霊による復讐譚ではなく、悪事露見の話である。これも殺生の罪が子に報いたともいえる。僧財を掠奪ひ一族悉く滅す(五話)は、陸奥国菊田郡の話として、江尻惣右衛門が子息を羽黒権現の社僧長明寺に預けていたが、これに手形を盗ませた。訴訟となり、負けた長明寺は断食して死去した。その後江尻一族にはこの住持が祟り、ことごとく死去して滅んだというもので、恵日寺の真言宗の名僧円智が祈祷したとあるから、この寺あたりが話の出所であろう。これも間接的に殺生を侵したことになる。甥を殺して網を焼く(六話)は、相模国で大工八郎兵衛は甥の悪人を扱いかね、これを海に入れて殺害し、これに祟られた話で、『犬著聞集』巻六・三十二話と同話である。非理に奴を殺し二子狂死す(七話)は、尾張国で毎年のように家来を手討ちにした遠山掃部の家で、二人の兄弟が狂死したというもので、これも『犬著聞集』巻七・十二話と同話である。人間への殺生も、動物への殺生と同様、子に報うものであった。馬を詐て狂死す(八話)は、松平阿波守の屋敷で、馬飼いが偽つて殿に馬を責めさせたため、馬が病死した。馬は馬飼いに取りつき、狂死させた

いうもので、『犬著聞集』巻七・二十二話と同話である。馬は人間同様悪霊となる存在であった。近世の説話においては、このような意味で動物と人間の生き方が近似するのである。奴婢を禁獄し蛇に変じて命を奪ふ（九話）は、江戸の商家に盗人が入り、下女に嫌疑がかかり、主人の妻の言でこれが寵死した。後に下女は蛇に変じて妻を取り殺した。主人は出家し、修行の身となったというもので、殺生による出家譚である。馬の肋骨をいためて神前に血を見る（十話）は、武蔵国八王子で、千人衆頭原某が常に馬を虐待していたが、その息子は社参から帰ると、馬の真似をし、死して畜生道に堕ちたというもので、これも動物の虐待が子に報いる話であるが、馬が積極的に復讐の行動に出るのがやはり特色である。また動物の虐待は、畜生道に堕ちることになると強調されたことも、近世的な特色ではないかと思われる。『沙石集』巻七・十二話のように、古代・中世の説話では、鷹狩にかかわって、鷹の餌にする動物への殺生が問題とされたが、馬の虐待の話が多いのが、近世の武家社会らしい特色であろう。大蛇を截害して後同日に死す（十一話）は、藤堂家家中の者が伊勢で大蛇を切り殺し、十三年目の同日同刻に水を飲んで咽んで死んだ。人々は蛇が祟ったのだろうと噂をしたという。人の変死には、生前の行為に因果が求められたのであった。米を奪ひ股をきり七代足を病む（十二話）は、関が原の合戦で山伏の股を切って死なせ、米を奪った武家の家では、七代にわたって足を病んだというもので、山伏が殺され、復讐するという話型も目に付くところである。虎皮牛をまとひ牛の鳴をして死す（十三話）は、牛に虎の皮を縫いつけ、見世物にして儲け、報いを受けたもので、『犬著聞集』巻八・二十一話と同話である。鼠指を食いたむ（十四話）は、江戸の小石川伝通院の所化が、鼠を捕え、握り殺したところ、鼠は指をかじって死んだ。その後所化は一生指の痛みに悩まされたというものである。これも寺院での殺生の罪が大きかったのであろう。すなわち第四報仇篇は大部分社会的弱者等が殺され、悪霊となって加害者を取り殺すという話で、その話に交じって動物もまた非道に殺された場合は、祟って殺したり、畜生道に堕したりするのである。

動物はより積極的になるのである。加害者やその子は狂死したりするが、さらには一門が減びるという手厳しい罰を受ける。そこに近世的な家意識の重要性がある。殺生の罪は子に報いるだけではなく、重い場合は家門に及ぶとされたのである。さらに『古今犬著聞集』との同話も見られ、説経的な説話においては、材料が固定する傾向にあり、これは古代以来の説話にも見られることであつた。

第八佞奸篇では、狸人を妖し却て取るレ死（四話）は、下総国私（ママ）法寺で古狸が日蓮の木像に化けて人をたぶらかし、射殺された話で、『犬著聞集』巻一・十七話と同話である。この篇のその他の話は、武家の殺傷事件等を実録風に記したものである。

第九崇鷹篇では、神仏等聖なるものを侵し、不幸に陥る話を集めているが、柳津の池の魚を毒殺す（四話）は、出羽の柳津の虚空蔵の池の魚を蒲生下野守が毒殺したというもので、『犬著聞集』の巻一・二十七話と同話である。蛇を殺して忽ち死す（十一話）は、出羽国の竜門寺の鎮守は竜であつた。ある時石垣の崩れから出た蛇を殺したが、それに加わつた人々はたどころに死んだり、病氣にかかつたりしたという。蛇童子をくらひ家族悉く滅す（十五話）も同様の話で、伊予国宇間郡竜の池の庄屋の屋敷はもと竜の住む淵であつた。寛永十五年（一四三八）大蛇が現われ、人々がこれを切り殺した。すると一門ほとんど絶え果て、類葉の此都という座頭のみが生き残つたというもので、『犬著聞集』巻六・七話と同話である。これらは土地の神たる動物を殺した罪であつた。

第十奇怪篇では、病床に猫来る（一話）は江戸の町家で、老下女の病床に猫がやつてきた話で、『犬著聞集』の巻七・三十四話と同話である。ここでは奇怪な話としてのみ理解されているが、『犬著聞集』によると、これも猫を虐待したためであつた。猫ばけて女となる（十一話）は、旗本の娘の後見になつた女が猫であつたというもので、『犬著聞集』の巻十一・二十話と同話である。この篇のほかの話としては、熊野崑洞大猫久しく棲む（二十五話）は、紀

伊国熊野に棲んで、里の犬・狸・狐を捕っていた大猫を退治した話で、貞享二年（一六八五）のこととする。また、蛇交じて人に交り懷胎して初て知る（二十六話）、古狼婦となりて子孫毛を被る（二十九話）は異類婚姻譚である。

第十二冤篇では、炒芥芽を生じ菊寺懸燈（二話）は、小畑孫市家で召使菊を殺し、一家が絶えたというもので、『犬著聞集』の卷十二・十三話と同話である。息女ひとり幽霊を見て忽ち死す（三話）は、戸川肥後守の息女の乳母が、料理人と密通し、二人ともに成敗された後、その霊が息女に復讐したというもので、『犬著聞集』卷十二・十四話と同話である。このあたりには『犬著聞集』と『新著聞集』の關係の深さがうかがわれる。怨念と戦おはりて背上に被れ疵（四話）は、岩城家中で阿弥陀寺隼人という者が主人に討たれた。その後討手の者はその霊と戦い、その傷がもとで死去したというものである。これらの話によると、主人から成敗された家来の恨みは深いものとされた。これは抵抗できずに殺されたためでもあろう。死尸人に附て念を告ぐ（六話）も、江戸で松平土佐守家中において国沢十右衛門が罪により誅せられ、その妻も同罪に処せられた。妻は崇りをなし、夫婦が居た長屋に住んだ人々は病氣になったり、死去したりした。その後死骸は僧によって弔われ、二度と崇りはなかったというもので、夢幻能の幽霊物のような構成を持っている。亡妻姿を現す（八話）は、嫉妬に駆られて死んだ妻が夫に復讐するもので、妬婦談に属するが、この種の話も本書には多い。この篇は直接殺されたわけではなくても、怨念を抱いて死んだ者が、死後に恨みを晴らすというテーマとなっている。

第十三往生篇では、絹川の二靈念仏生転ず（九話）は下総国岡田郡のかさねの話で、本書では与右衛門の子の菊等の成仏に重きを置いており、この点は『犬著聞集』卷十二・一話と同様である。

第十四殃禍篇では、犬を殺し報を現す（六話）は蒲生下野守の家来が主人の秘蔵する犬を殺して食したところ、犬のようになって狂死したというシンプルな話で、近世の殺生譚の典型である。人を殺し年を経て斬にあふ（七話）



は、京都で辻斬りをした男が十四年を経て、丹波で発覚したもので、これも仏教的な色彩よりも、事件の顛末に重きがあるようである。鶏の毛頭に生ず（十三話）は、美濃国御岳村の話として、鶏卵を好んだ男が、頭がはげた後に鶏の産毛が一面に生えたというもので、鶏卵を好む罪の話は『今昔物語集』巻九・二十四話など、伝統的な話題であった。頭に鳥の嘴を生ず（十四話）は、江戸の商い聖のもとで、八王子出身の餌差の子を使っていたが、この子が病死すると、頭には鳥の嘴が生えていたというもので、餌差の罪は『犬著聞集』巻一・三十五話にも見える。このように近世には畜生道に堕ちることを暗示する話型が多い。殺生の現業無根の形となる（十五話）も上総国の鳥網を好む百姓が後に異形の姿となったとうもので、能「善知鳥」の近世的な型とも見ることができる。楊枝咽に入りたちまち死す（十六話）は越前国の高島某が日頃釣を好み、ある朝楊枝を咽に刺して死んだというもので、これも『犬著聞集』巻一・九話と同話である。犬打久六あやまつて娘を打殺す（十八話）は、丹後国の犬打の話で、『犬著聞集』巻三・三十四話と同話である。産婦恩をわすれ熊のために害せらる（二十一話）は、近江国甲賀郡で、山中である産婦が熊に助けられてお産をしたが、その後狩人にその居所を教えたため、熊に殺されたというもので、動物は人間の恩に報いるのに対し、人間は動物の恩を忘れやすいことを物語るものである。これも古代以来の説話に見える動物観である。狐の耳口をきり根闕の子を産む（二十三話）は、伊勢国日永村の話で、『犬著聞集』の巻四・十七話と同話である。鴈の羽毛をぬき手なき子を産む（二十四話）も尾張国山崎村の話で、『犬著聞集』の巻四・十七話と同話である。この箇所にも『犬著聞集』と『新著聞集』の関係をうかがわせるものがある。非理に牛をつかひ牴触せられて死す（二十六話）は京で主人に仕事を怠けたと疑われ、責め使われた牛が主人を突き殺したというもので、牛による突発事故の原因がそこに求められたのであろう。父を殺し属滅す（三十話）は、尾張国の武家の家で、結婚をめぐつて親子が不和となり、子が父を殺したため、子は親類に切腹させられ、その妻も磔となって、一族が絶えた顛末を記す

もので、延宝七年（一六七九）のことという。これは仏罰というよりも、法的な処置が叙述されている。このほかこの篇においても、慳貪による不幸、不孝による不幸と種々の原因による災厄談があり、殺生による不幸はその一部となっている。

第十六清直篇では、狐君命をおそる（二話）は、尾張大納言が狐を捕えさせた。狐は自分の生き胆を取る者の妻に憑いて恨みを述べたが、これは薬用であると説得され、鎮まったという。理非に基づく判断に、狐が従ったこととである。これも狐譚の近世的な形であろう。二狐命にふくし盗狐を縛り来る（六話）も、丹波国亀山において、すっぱんを食い散らした狐を、友狐が捕えてきたというものである。夢中に狐来り自ら誤らざる事を訴ふ（十五話）は、安藤対馬守の屋敷で孔雀が狐に食われ、守が怒って邸内の稻荷社を破却したところ、夢に狐が現われ、当家の狐の仕業ではないことを訴えたというものである。これらは道理に服する清直は、人間のみならず、動物にも及ぶものであるというテーマを持っている。

以上、『新著聞集』における動物の殺生譚等を分類すると、次のようになる。ここにおいても、人間に対する殺生には、\*を付した。

動物の死とその夫婦・親子の恩愛：第二・一話、同・二話、同・三話、同・六話

殺生による出家譚：第二・六話、\*第四・九話

動物の報恩譚：第三・一話、同・二話、同・三話、同・四話、同・五話

動物の復讐譚：第四・一話、同・八話、同・十話、第十・一話、第十四・二十一話、同・二十四話、同二十六話

殺生による不幸型：第四・一話、\*同・二話、\*同・三話、\*同・四話、\*同・五話、\*同・六話、\*同・七

話、同・八話、同・九話、同・十話、同・十一話、\*同・十二話、同・十三話、同・十四話、第九・十一

話、同・十五話、\*第十二・二話、\*同・三話、\*同・四話、\*同・六話、\*同・八話、第十三・九話、第十四・六話、\*同・七話、同・十三話、同・十四話、同・十五話、同・十六話、同・十八話、同・二十三話、同・二十四話、\*同・三十話

子に報う\*第四・二話、\*同・四話、\*同・五話、\*同六話、\*同・七話、\*同・十話、第九・十五話、\*第十二・二話、\*同・三話、第十三・九話、第十四・十八話、同・二十三話、同・二十四話

人に害をなす動物を成敗する：第八・四話、第十・十一話、同・二十五話

殺生禁断を犯す：第九・四話

動物が道理に従う：第十六・二話、同・六話、同・十五話

人間と動物の婚姻：第十・二十六話、同・二十九話

この書においても殺生による不幸型が多く、この種のストーリーは単純なものが多い。『古今犬著聞集』と同話が多く、殺生譚のみならず、その奇談性や教訓性の面白さ故に著名となった説話は、近世を通じて様々な書に記されていったことであろう。これは説話の有り方の定型でもある。この観点ではさらに多くの近世の文献を調査する必要がある。

## 九

まず『古今犬著聞集』や『新著聞集』に共通する殺生譚をあげておく。始めにあるのが『犬著聞集』の説話で、次に続くのが『新著聞集』のものである。

卷一・九話：第十四・十六話、卷一・十七話：第八・四話、卷一・二十一話：第三・三話、卷一・二十七話：第

九・四話、卷三・十五話：第三・二話、卷三・三十四話：第十四・十八話、卷四・十七話：第十四・二十三話、卷四・十七話：第十四話・二十四話、卷六・七話：第九・十五話、卷六・三十二話：第四・六話、卷七・十二話：第四・七話、卷七・二十二話：第四・八話、卷七・三十四話：第十一・一話、卷八・二十一話：第四・十三話、卷九・二十七話：第二・六話、卷十一・二十話：第十・十一話、卷十二・一話：第十三・九話、卷十二・十三話：第十二・二話、卷十二・十四話：第十三・三話

両者の間にはまだこれらをつなぐものがあるであろうが、ここでは省略する。不殺生を説く談義においては、その具体例としての説話が固定化する傾向にあった。これは他のテーマにおいても同様であろう。

『古今犬著聞集』や『新著聞集』によると、殺生譚としては殺生によって不幸に陥るタイプが多く、出家を機縁とした出家譚は少ない。年月や場所を明確に記すなど、これらは事件としてリアルに描かれており、説得性に富んでいる。殺生を侵した者は来世で地獄に堕ちるのではなく、現世で報いを受けることが多いとされている。人々の異常な病氣や死は、殺生に原因を求められたことも多かったようである。また動物のみならず、人間への殺生譚が多く、動物も人間も殺されると崇つて復讐するとされた。その復讐は子に報いだけではなく、家門全体に及ぶとされることも多かった。一門断絶は近世人の恐れたことでもあった。殺生は不幸や慳貪と同様の結果をもたらすものであつて、殺生譚には仏教だけではなく、儒教的な倫理観も見られる。またこれらの話には仏教的な因果応報観のみならず、法や理非を重視する現実的な感覚もあり、近世らしい価値観が見られる。しかし一方では古代以来の殺生譚等の話型が、近世風に形を変えて再生産されていることも多い。そこに古代以来の説話文学の伝統が息づいていることも認めることができる。

『古今著聞集』の系譜にある書としては、宝暦七年（一七五七）の『近世江都著聞集』<sup>33</sup>、文政十一年（一八二九）の

『猿著聞集』がある。この論考は仮名草子を主とするものであるので、後期のものは省略することとする。

いずれにせよ動物に関する説話の根底には、人間の動物に対する深い精神的な結びつきの感覚があり、しかもそれは複雑なものとなっている。

注

(28) 以下、仮名草子集成第二十七巻・二十八巻（東京堂出版、平成十二年）による。

(29) 大蛇の生贄となる話は、御伽草子「法妙童子」等種々あるが、生贄の意味については、小松和彦「雨乞いと生贄」「異人・生贄・村落共同体」（『説話と宇宙』人文書院、昭和六十二年）参照

(30) 日本古典文学大辞典（岩波書店）同書解説。なお、『続著聞集』は寛文元年（一六六一）刊の仮名草子『似我蜂物語』の解題本という。この書は禅宗系の談義的性格を有する（安原真琴「法語と文学―抜隊得勝『塩山和泥合水集』を例に、平成十九年五月、仏教文学会例会発表）。

(31) 堀内信編『南紀徳川氏』第一巻（昭和五年）

(32) 日本随筆大成第二期5による。

(33) これは江戸の遊女や歌舞伎役者についてのもので、動物譚はない。

（完）

この論文は「近世における中世的説話集の研究」というテーマで、平成十六年度に専修大学より助成を受けた研究成果の一部である。